

2010年10月21日

法政大学 総長  
増田 壽男 殿

社団法人 日本建築学会  
会長 佐藤 滋

### 法政大学 55・58年館の保存活用に関する要望書

拝啓 貴学におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましては、多大なご協力を賜り厚くお礼を申し上げます。

さて、貴学のホームページ上で公表されている「教育研究環境の整備に関する方針」(2010年3月10日)を拝見し、市ヶ谷キャンパスについて「55・58年館については、建物の老朽化対策も急務である。このため、市ヶ谷校地においては、今後も老朽化した建物の建て替え・改修工事・設備の更新を実施するなどの改善を検討していく必要がある」と、55・58年館の建て替えが計画されていることを知りました。

ご承知のように、法政大学 55・58年館は、戦災からの貴学の復興計画の中で、新制大学として発足後間もなく就任した大内兵衛(1888-1980)大学総長の決意を受け、貴学の大江宏(1913-1989)教授が、キャンパス全体のマスタープランとともにその中心施設として設計した記念的建築であります。建物全体が竣工した1958年の翌年に、本会は、その優れた作品性を高く評価し、日本建築学会賞を授与いたしました。また、1958年度第9回芸術選奨・文部大臣賞、1960年度BCS建築賞を受賞していることから明らかなように、戦後日本の大学キャンパスに建てられたモダニズム建築の傑作として、竣工当初から現在まで一貫して高い評価を受けてきた著名な建築作品です。その歴史的・文化的価値については、別紙「見解」に詳しく述べましたが、それらはキャンパス内の施設の建て替えが進行中の現在において、その価値をより一層高めています。

竣工から50年以上の間、大切に維持されてきた法政大学 55・58年館は、今では登録文化財の資格を得た本格的なモダニズムの高層建築という時代を先取りした文化遺産となっており、その保存・活用は大学の使命として不可欠な「伝統の継承」を表現するとともに、「持続可能な都市・景観」という社会のあるべき姿を貴学が率先して示す貴重な機会となるものと考えます。この建物の持つ高い文化的・歴史的価値について改めてご理解いただき、このかけがえのない文化遺産が永く後世に継承されますよう、適切な保存活用のご配慮を賜りたく、心からお願い申し上げます。

なお、本会はこの建築の保存活用に関して、できる限りの協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具

2010年10月21日

## 法政大学 55・58年館についての見解

社団法人 日本建築学会  
建築歴史・意匠委員会  
委員長 谷 直 樹

法政大学 55・58年館は、戦災からの法政大学の復興計画の中で、1950年に建築学科教授に就任した大江宏（1913-1989）が、キャンパス全体のマスタープランとともにその中心施設として位置づけた記念的建築であり、1955年に建物西側が、1958年に建物東側が完成して全体が1958年に竣工した。これに先立つ1953年には55年館の西側に「53年館（大学院）」が建てられている。いずれの校舎もピロティ、ガラスのカーテンウォール、コンクリート打放しといったモダニズムの手法を駆使したものであり、これら一連の法政大学の校舎は、大江宏の最初期の代表作として知られている。

法政大学 55・58年館は、以下の3点において特に高い価値を有していることが指摘できる。

### 1. 学生の多様な活動形態に対応した合理的な平面計画と豊かな空間構成

55・58年館の設計内容については、日本建築学会賞の選定理由として「機能性と人間性への深い配慮」や「環境に対する的確な構想」が高く評価されたように、学生の多様な活動を機能的に充足させつつ、それを豊かな空間構成にまで昇華させた点が優れている。建物の機能を造形・空間的な特徴として表現した具体的な点としては、収容人数の違いに応じた講義室の合理的な配置（大講義室は低層別棟、中講義室は3階、小講義室は4～8階に集約）、エレベーターコアと南面の外部傾斜路を併用した合理的な避難計画、将来的な拡張性に配慮した地下室への機械室の集約などにそれが窺えます。

一方、学生の多様な自主的活動に対しては、校舎の地表レベルにおいてピロティで建物を南北方向に貫く軸線を確保し、そこに学生の諸活動を支える学生ホールを配するとともに、その軸線の先に飛石を配した日本庭園（築山「大内山」など）を設けることで、近代的な空間と伝統的な空間の調和を実現している。市ヶ谷キャンパスにおける学生の多様な自主的活動は、こうした地表レベルの魅力的で豊かな空間構成の中でこれまで育まれてきたと言え、よって今後もこの空間構成を活かした保存活用の方法を検討することが望ましいと言える。

### 2. モダニズム建築によって戦後の都心型大学キャンパスの記念性を表現した先駆例

都心部の狭隘な市ヶ谷キャンパスにおいて、その中心施設として計画された55・58年館には、新制大学として急増の一途をたどる学生数を高層建築によって收容すること、大学を象徴する「モニュメント」としての表現が同時に求められた。この課題に対

して設計者の大江宏は、当時の欧米で実現しつつあった「ガラスとコンクリート打ち放しによる高層建築」というモダニズム建築の手法をいち早く導入することで、その解決方法を提示した。設計者である大江は、「現代の建築が負う可きモニュメンタリティーは、このようなコミュニティーの持つ迫力が自ら発する強烈なイメージによって、現実の造型にまで高められます」と、その設計趣旨を述べている。

近代主義の建築家による新制大学のキャンパス計画は、その後、明治大学生田キャンパス（堀口捨己）や東海大学湘南キャンパス（山田守）などでも試みられたが、いずれも郊外の広い敷地に建てられた中層建築であり、その点でも大江の法政大学 55・58 年館は、都心型のキャンパスのあり方を集約型の「高層建築」という形で示した稀有な事例であり、昨今あらためて都心回帰が始まっている大学キャンパスにとって、その古典的な先例として存在価値を高めている。

### 3. 外濠公園の自然との対比がもたらす景観要素としての価値

ガラス張りの高層建築として敷地内の高台に建てられた 55・58 年館は、敷地内においてはモダンな記念建築物としてその威容を来校者に示しつつ、同時に周辺地域から見た景観としては、特に隣接する外濠公園の街路樹があることで生み出される「建物の近代的な美」と「外濠の伝統的な景観」との対比によってこの地域に独特の美しい景観を与え、それが長い間この地域の住民や数多くの卒業生に親しまれてきた。現在は、キャンパス内の超高層建築によって視角が限定されているが、それでも正面の外濠公園から眺めた時の建物と自然とのコントラストは四季を通じて美しく、竣工時からの建物と周辺環境との良好な関係性を今に伝える貴重な文化遺産となっている。

なお、千代田区の外濠地区は、財団法人古都保存財団の選定した「美しい日本の歴史的風土 100 選」にも選定されており、そうした歴史的風土と一体となって優れた景観を形成してきた点にも、法政大学 55・58 年館の高い歴史的価値を認めることができる。







(撮影：山崎鯛介氏)